

巖

下

電

○黒かる可からず、白かる可からず、人の生ける要訣は、鼠色なるに在り。之を天にかたどりては、半晴れ、半陰れる雲の如くなるべし。之を地にぞらへては、半乾き、半濡れる泥の如くなるべし。交錯せる、掩映せる、猶黑白の辨たるべし、全く混化せよ、融合せよ。所謂たんまりしたる儲口は、多く鼠色の産む所たり。

○墨子練絲に泣けるは、以て黄にすべく、以て黒にすべきが爲なり。今人會すれば輒ち曰ふ、潔白なりと。潔白のあかりを立つること、今人の如く急なるはなかるべし。いかにも潔白なり、潔白なるが故に油斷ならざるなり。往の潔白は、いつ何時、歸りに染まるを保せざればなり。

○赤は花の色也、火の色也、血の色也、舌の色也、襦袢の色也。而して古來の傳説に據れば、謠も眞赤なる者也。

○茲に虚偽と、羞恥との關係を究むるにおよばず。恥も謠と同じく赤きものとぞ。

○どうやらまばゆき薄紅葉、ぼつと赤らむるといふは、あまりに素顔の不味なるを氣遣ひて、神の加へたる色彩也。人間より言はゞ、天賦の才能なり、藝術なり。これを發するの場合と、方法とは隨意なり。

○恥はもとより倫理上の事に非ず、生理上の事也。酔はゞ一層赤かるべし。

○赧顔とは、赧顔ならぬ時の謂也。形容詞に屬す。實際赧顔を告白し、披陳し得る程にわが同胞は卑怯ならず、應病ならず。

○特更に赤心を吐露すといはざれば、吐露するもの赤心にあらざる乎。赤心、丹腸、われ之を岩谷天狗の居宅に觀、着衣に觀る。岩谷天狗は落書の名人也、國益の親玉也。

○われは飽迄、月は青しといへる高山氏の説に同せんとす。かさねし月の末に至りては、人皆青息を吐くときけばなり。言ふ迄もなく、一變する調色と與ふるなり。

○俗に聲音を色に取りたるもの、古く唯一あるのみ。黒といはず、白といはず、赤といはず、

青といはず、黄色いといふ。まことや思ひはかれば、黄はこがねの色也。京傳本に就て考ふるに、こは中に求めて、外に治ぶの聲なるが如し。

○年を積むこと三十三、少からずと雖も、しかも多からず、熟せりとは謂ひ難かるべし。明治の事々物々は、猶ナマたるを免れず。ナマは生氣なり、生氣は現時社會の一般を通じて、表裏に躍動するなり。この故に才人智者、略して現ナマと稱す。着るを要せず、炙るを要せず、瀧民舉つてかく簡易に、かく輕便に唱和せるは、未東西の歴史に見ざる所、隨つて教科書に見ざる所なり。

○官吏も商ひなり、議員も商ひなり、一として商ひにあらざるは莫し。商ひの盛んなるは、賣買の盛んなるなり。賣買の盛んなるは、金錢授受の盛んなるなり。要するに、商業は金錢也。商業より金錢を脱離せよといふは、天下比類なき不法の註文也。況んや各自、商業の發達を企圖しつゝあるに於てをや。金錢重んずべし、崇ぶべし、百拜すべし。日本は世界の商業國たらざる可からず。

○恐るべきベストよ、恐れても目恐るべきベストよ。來りて悪者を斃せ、猶來りて善者を斃せ。

人幾千萬を斃したる時、金萬能の世は少しく搖きて、其處に微かなる信仰の光を認むるを得んか。

○是れ戲談のみ、孰か一ベストのために、國の安寧、靜謐を害するをゆるさんや。各人相戒めて豫防する今日に於て、金銭は生命ならざる今日に於て、あゝこれ一場の戲談のみ。

○獲ては叶ふまじき金の手に入りたる時、必ず正當に其目的に向つて、全額は支拂はるゝものなるか。有用、無用は姑く言はず、これも問題也。恐らくは其二分の一、三分の一は當初の目的が包含せざりしことに、使果たざるゝを例とするならん。甚しきは其獲ざる以前は、元金の償還なりしも、獲たる以後は、利子の填補に止まるもあるべし。人は自己が手中の錢の頭を張るか、刎ねるかして悦ぶ者なり、樂む者なり、わづかに活くる者なり。即ち他人の棒先は切らざる迄も、自己の棒先は切る者なり。

○我邦二箇の政黨が有する性弊は、曾て伯爵各一箇を推戴せる間に於て、いとよく分明にせられたり。隈伯の徳なきに、行はんとする、今尙進歩派の者たり。板伯の智なきに用ひんとす

る、今尙自由派の者たり。政黨は一人の政黨に非ず、奈何せん、一人は政黨の一人也。彷彿として名残は去りもやらず、盡きもやらず。遠慮なるかな、渺茫なるかな。

○若板伯に惜むといはず、責むるに時勢の推移を知らざるを以てせば、隈伯にも亦惜むといはず、責むるに時勢の推移を知らざるを以てせざる可からず。面前よりすると、背後よりするとの別あるのみ。嗚すると、嘯するととの別あるのみ。

○名に取れたる自由派は、漸く利のものとなりぬ。利に取れたる進歩派は、漸く名のものとなりぬ。轉換なり、異動にあらず。異動なり、革新にあらず。

○體裁好く言はば、進歩派は筆なり、鴉なり。自由派は劍なり、豚なり。是れ文武の差あるを言へるにあらず、鳥獸の差あるを言へるなり。再記す、體裁好く言へるなり。

○少数は手拍子也、建設也。多数は足拍子也、破壊也。

○總理を置けるは、引附けんが爲なりき。總務に更へたるは取返まんが爲なり。
○大惡筆を揮つて、大扁額を書する者あるを見たる時、われは世に星亨君あるをおもひぬ。

龍蛇走るといはんか、風雨生ずといはんか、まことに淋漓たる墨の痕也。されど到底、字の形にあらず。

○前に立つを、提灯持といへり。今の提灯持は、殊に今の政府の提灯持は、いづれも後に立てり。

○人の目、人の耳はやがて掠むるを得べし、視聽の力は老衰に伴ふ者なればなり。人の口は遂に掠むるを得可からず、頬指は死に瀕するも猶叩かるゝ者なればなり。なべて老者の邪魔がらるゝは、口の邪魔がらるゝなり。厄介がらるゝは、口の厄介がらるゝなり。口ばかり始末悪きはなし。

○人形の愛らしきにむかひては、口利くこと吾妹子の如くならんをおもひ、吾妹子の優しきにむかひては、口利かぬこと人形の如くならんをおもふ。

○紳士とは服装の事なり、思想にあらず。車馬の事なり、言語にあらず。かくて都は樂土たり、人物の會萃たり、幾千百種の書の發行處たり。

○自ら描らざる者は、他をも描らざる者なり。容喙するに如かず、自己の地位、境遇、力量を忘れんと欲せば、つとめて容喙するに如かず。

○ いたいけなる人の子よ、怪我過ちにも己を知るなかれ。己を知るは上無き悲み也、苦み也、わづかに知らんは、死を待つにひとし。大いに知れるとき、腰に辨當あり、神田橋を出入せざる可からず。肩に天秤あり、鮫ヶ橋を往返せざる可からず。

○ 思ふにつけて鴛鴦こそは、いと興饒き處なれ。女學校あり、癡狂院あり、監獄署あり。

○ 己を知らざるもの、詩人を以て最とす。狂人之れに次ぐ。

○ 聞くならく詩の熱は、情の熱とぞ。大天才を得るに先つて、大色情狂を得ざる可からず。是れ實に緊要の事也、必須の事也。眞面目の事也。

○ 幸ひの上に、かの侯爵閣下あり。下に、文學隆盛なり。

○ 生活のためにしたるものは、名のためとなりたるべく、名のためにしたるものは、生活のためとなりたるべし。

○ 各自が實名に、戸籍簿以外に存す可くもあらず。他は虚名のみ。虚名は飯の湯氣なり。長く虚しからぬ名を求めんとする人は、長く温かならぬ飯を求めんとする人なり。

○ われらは作者諸子が、われらに慈悲の教訓を

垂れんがために、夜を日に繼ぐの勞苦に服するを謝せざる能はず。こゝに於てか社會は諸子の前に、粗末ながら米の飯を呈したり。猶其上にも諸子の芥に憩ふる所あるは、諸子が忿の稍過ぎたるものにあらざるか。

○ 多才なる作者諸子と雖も、飯食ひ茶碗は唯一つなるべし。他の品を盛るの餘地あらんや。いさゝかだに餘地あらば、其處に早く盛られたるは空氣なり。

(明治三十二年十二月)